

ユーラシア大陸を歩く

和田航一

昔のワングル OB 仲間とロンドン出発から 12 年、ユーラシア歩き旅は黄土高原を過ぎ、この秋中国は北京の南 400km までに達した。今回は 9 月 21 日から 2 週間の旅とし、前回の終点、黄河流域の三門峡から洛陽、河南省の省都・鄭州、安陽、黄河を渡り、邯鄲を通り石家荘の手前、沙河大橋まで 520 km を歩いた。平均年齢 67 歳、最高齢 73 歳のメンバーが前半、後半延べ 10 名が参加し、2 人歩き、1 人歩きを交え各班 1 日 20～25 km の歩きとした。東西に延びる国道 310 号、鄭州から北京に向かい北上する国道 107 号をたどり河北省に入った。

道の両側にプラタナスの並木がそびえ、道に長い影を映している。村々では収穫した黄金色に光る玉蜀黍を乾し、畑には綿の白い実が点々と見える。木の梢ではカササギがジジと鳴いている。道々で出会う村人に「ニイハオ」と声をかけると笑顔で「ニイハオ」とかえる。昼食は町外れで見つけた飯屋でビールと麺ですませ、店の夫婦・子供と身振り手振り筆談で団欒しポラロイド写真を撮って渡し喜ばれた。

中国語で作った歩き旅の趣旨書を示し、サインと感想を書いてもらう。趣旨に感動して昼食代金を受け取らなかったこともある。

今回は北京外国語大卒、ガイド暦 17 年の張さんは中国の歴史を詳しく語り、張さんの育った鄭州お国自慢は好ましかった。日本の歴史や現状にも詳しく、歩きチームの一員となって打ち解け、この次の北京、天津への旅にも同行を約束した。

前半歩行 2 日目は盛唐の詩聖・杜甫の出身地・恐義市の中心に立つ杜甫の巨像の前が出发点となった。誰言うともなく、杜甫の春望「国破れて山河あり 城春にして・・・」とつぶやく。像の前で全員記念写真を撮った。改めて見ればメンバー 6 人の容貌は杜甫の詩文そのまま「・・白頭搔くさらに短く・・」であった。洛陽では、杜子春が仙人に出会った洛陽西門を探したが、城壁はすでになくなっていた。

黄河は鄭州で川幅を大きく広げ、河面、砂州をホバークラフトで遊覧した。毎夜宿で皆一室に集まり、強い白酒（中国の焼酎）を飲み交わし、邯鄲の宿では歩き通した 12 年の“邯鄲の夢”を見た。邯鄲双台公園では地方紙・邯鄲晩報の記者が目ざとくわれわれを見つけ、写真を撮られ取材を受けた。洛陽・竜門石窟、北京・故宮博物館は折からの国慶節（10 月 1 日）で中国の観光客で賑わっていた。中国の大きさ、多様性、あふれるエネルギーを直に体験した歩き旅に満足した。